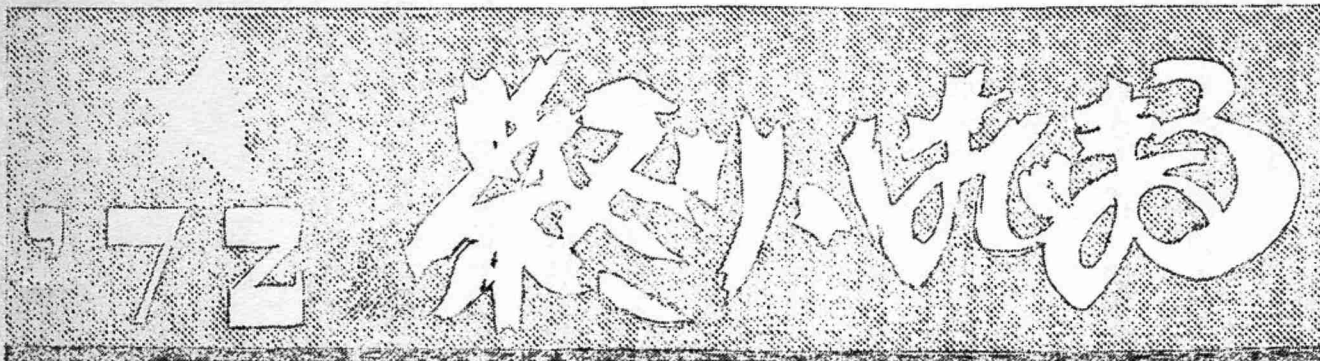


破境論

序説 (1)

5. 16



「ガ・リ・キ・リ
まへっしうじよう」

破境というとはな、つい最近まで、よく耳にした。破境という雑誌も発行されている。破境とてここで呼ばれているのは、あくまで中世に対するものとして意味されている。それは、同時に、中世との対極を成すが故に、文明の性格は全面的なものとなつておらず、過去から連続する文化の内に社会全体が埋没している。それは土着といふ内容を不可避的に孕む。(このへんの問題を整理すると、情況批判としての、其団体主義、批判は簡単に展開できる。)

そのうちの15日、すなわち、御経「返還」の日、ほくはアルバイトしてにんです。そこは四糸通りに面していて、その通るのびよく見えるのだから、社・共・統評の隊列の長いこと、さすが「日本の夜明け」の都市、京都だけのことはある。

今までふれてきたのは、破境のもつ一面にすぎない。それは、ひなへ鄙と云いかえることによつてより明確なものとなるだろう。というなら、他の面は、いわずもがな、国境としてである。それを現代語にない直すなら国境である。境界を背にもっているのである。さて、これから本誌にまつてゆこう。境界とは何ぞや。

そのうちに逆方向から平連のテモなやつて来たのだから、その内に身障者の車椅子による隊列があった。彼らは、全員黒ヘルをかぶっていたのだから、彼らを見てバイト史のおぼちゃん、その時血洗いをやつてはよくにこういった。「腹立つわめ、なにがと向い返すはくに返ってき返のは、一瞬耳を疑ってしまふ言葉だった。あの人らへテモに加っている身障者、自分らの「分」も考えてへんやないの。

「破境」とは、まづ他に対する自己存在の主張としてある。それは単なる自己主張にとどまらず、その対立体へ絶えず侵蝕せんとする、その権威の意志として流動的に進退する。だが決してその対立体の存在を抹殺することはない。何故なら、その対立体が定立せぬことには、権威は権威として成り立ち得ないからである。故に、境界は、権威の成立の媒介としてある。

「分」とはもうろん自分の「分」である。ここをおぼちゃんを批判する意図なども預ない。「そんなんおかしいの違いますか、そう言えはよくのことばは、客の到来によつてかき消されてしまった。へん

「ハナ1例」 神と人間における「境界線」を養条にして、神学体系にまで高めたのは、ドイツの神学者ティリッヒである。権威(神)はそれ自体として存在せず、また、それ故に意志も持たぬ。だが、それが権威としてあるのは、その対立体(人間)が、自ら作り出したからである。つまり、人間が、そのもつ能力を越えるもの、正確には、そのもつ能力の限界外の諸力のすべてを「神」の力のあるもの、という觀念体系にまで高めることによって、権威(神)が形成され、その意志が形成される。ここでは、対立体においてのみ意味をもつ境界としてあらわれる。これが、境界のもつ一つの類型である。権威と対立体とは、一方において他を生成せしめる。それが故に、異次元の対立物である。だが、両者が関係するためには、一方を他者の次元にまでひき寄せねば、それとして永遠に「無関係」という関係しかもつこ

バイトへ向う途中、民衆のテモにぶつかり、その彼らの生々とした行動、表情を見ながら、自分がこつともなく恥かしかつた。彼らのように、全面投入できないのは、まさに醜態を曝け出している。だが、醜態を曝け出しつつも生きつづけることが、今、必要であると君直り、パナソニック屋に駆け込んだ。そこを逢ったのは、高校時代の平連の顔見知りであつた。「卒業できんかったんや」という、長髪の彼を見てみると、何故か、無精にその場を離れてしまひにかけたのだ。

そんなこともあり、9時にバイトを打ち

とがふきない。それが取に、異次元の対立物を同次元的に扱うこと
によって、両者が真に対立物として定立するのである。それには、
両者の同質化が成されねばならず、そうすることによって、両者は
両者の意志において境界が形成されるのである。

ヘオの例へ 先月、高松時代の友人がインド洋にうなづいた島国
モルジブへと旅立った。今、彼が住んでいるのはモルジブという国であり、
ほくはないのは日本という国である。この国、というのは、国家とし
て、現代世界に存在している。ここには、その比重を重くみる。国
が国家であることを主張するには、その明確な固有の領土を必要と
する。国家の現時的意志としてある国境は、同時に他国家の意志で
もある。国家は、故に、他国家の存在を認めることによって、地理
に国家を定立しえる。

このようにヘオの例へにおける境界は、同質のものとしてある権
威と相立体の意志が、相互排斥と相互定立の媒質としてある。それ
は、一方が他への意志発動を相対的に強度なものとして行使するな
ら、容易に消滅しうる。何故なら、境界を生成するところの対立物
が消滅してしまうからである。だから単に「消滅」してしまうのでは
ない。その境界は、次元を変え、異質なものに変容しつつ、やはり
類としてそこにある。(これは対立物として創出したヘオ家の本
質によるものである。次例。)

ヘオの例へ ヘオの例へを受けて創出する。それは、国家と、一
民として存在する人間の関係である。

友人がモルジブにいて、ぼくが日本にいても従来通り本質的な相
違はない。強いていえば、彼にとっての生活環境の激変と、両者が
少なくとも一年間、その交通を断たぬというぐらいのものである。
今の所、彼における彼とぼくの決定的相違、そのことが、ここでする
本質なのだが、はたして、彼は、パスポートを所持しねばならない、

という、まさにこの一点に凝縮される。彼の恒的意志にかかわらず
それを所持しねばならないのである。何故なら、彼が彼の意志によつ
て日本という国家の制約から一時的にのびることによって、広い
かえるならば、自己の生活する市民社会から脱することによって、
それまでのオフラートをほきして国家意志と真正面から対峙するこ
とになったからである。そこで両者、真に相立物として位置する彼
の存在の定立のために、各の意志間の互いがなされ、パスポートと
して発現する。

このように、国家と、国民としての人間の関係、そしてそこにあ
らわれる境界の持つ意味は、ヘオの例へと型態的に類似しつつも、
その本質は、全く位相を異とする。

ヘオの例へはとりだてて述べるはこの混乱が生じぬだろうな。
ヘオの例へとヘオの例への異なった位相を明確にすめのならば、
大抵な混乱を生じることなしに、破壊論構築の際、とりもどすこので
きぬほどの大さは支障をきたすだろう。(以下、次篇「機軸を定」)

切つて店をどき出してみても、どうしよう
もなく、とぼとぼと装束の止まっている
円山公園へ向った。その集会に行つても
どうしようもなかった。某公発行物の「こ
れで解散します」といことばを耳にするま
でホワーンとすわっていただけである。

その夜のインク

だろう。

◇ ◇ ◇

へおれり、はじまるへへおれり、二月
へおれり、はじまるへへおれり、三月、三回
分のへおれり、はじまるへへおれり、印刷も
すませてあるのです、それを送るかどう
かまだ決めかねています。

◇ ◇ ◇

今月は、自由連合社の企画する「こころ」
某に「向」に合え、の話しですが、参加する
つもりでかり切りしています。(5/17朝)

※ このことに対する、模索のための
思考として、破壊への思想があるの
だから、そして、解法の道は、一体どこ
にあるのか。

一つ「王ピソード」をば。ここでは修正液(※)
は全然使っておりません。Jの「マニキアア
」なので。透明の「こころ」、二種類の「こ
ころ」。

◇ ◇ ◇

故高橋和子の「わが解体」を、今読了
したのである。

一年前の備北五月キャンパスに行つていた

とき、彼の死が報じられた。そのころは、
彼の文章―評註―思想に訂しては、大して
評価していなかったが、今はらなうとみえ
る。確かに彼を認めてゆくことは容易なら
ぬものであるにしても、彼を自己のもの
としてゆくならば、それは、その人の思想を
形成してゆくことに連なる。

単なる踏襲こそ徹しく批判されねばなら
ない。彼が「内」の論理は越えられぬか
で述べているように、論理を隔に他の諸々
の「私」的なるものを切り取るとき、人
間は奇修羅になる。革命は地獄の絵巻物と
なる。

今日も、人々の活動が始まった。明日も
おそく、同じように一日が始まるだろう。